

初代南極観測船「宗谷にタッチ！」

～だれもが楽しめる、五感を使ったこれからの博物館活動～

(公財) 日本海事科学振興財団 (船の科学館) 学芸課 高橋 昌代

1. はじめに

当館は、1974（昭和 49）年のオープンから既に半世紀の歴史を経る、船や海の文化をテーマとした海洋総合博物館である。2011（平成 23）年からはメインの施設であった本館展示場を展示休止しており、現在は「船から海へ」と大きく舵を切り、海洋教育の推進を大きな柱としながら新たな博物館構想を描き、リニューアルに向けた様々な準備活動を行っている。新たな展示の検討はもとより、あらゆる方々が楽しみながら海について学べるプログラムの展開についても実践を通じた検討が進んでおり、今回はその中でも視覚障がい者を対象とした、当館ならではの事業をご紹介させて頂きたい。

当館では、2016（平成 28）年より、初代南極観測船“宗谷”という実物の船舶を使って、視覚障がい者を対象にしたタッチングツアー「宗谷にタッチ！さわって学ぶガイドツアー」という事業を行っている。“宗谷”と言えば、そのエピソードは何度も映画やテレビドラマになっており、ご存じの向きもおられるだろう。「宗谷にタッチ！」とは、その名の通り、1931（昭和 13）年建造の“宗谷”の船内をさわりながら見学し、さらに普段自由に立ち入れないエリアも、ガイドやヘルパーと一緒に立ち入って体験（さわる・匂いをかぐ・音を聞く・声や音を出す）する、概ね 1 時間半のツアーである。

最近では毎回募集をかけるたび、一回 5 組の定員の 4 倍以上の方からお申し込みをいただくようになった。驚いたことに申込みは、当館のある首都圏だけではなく、遠く九州の福岡県や、京都、大阪、長野などからも入ってくる。視覚障がい者の皆様は、とてもアクティブだ。

2. 始まりは「海と船のおはなし会」

平成 21 年頃、当時筆者は船の科学館本館の 3 階にあった「読書ルーム」という図書室で仕事をしていた。そこにある日、二人連れのお客様が来室される。お一人は都内在住のお客様。もうお一人は友人の新聞記者の方。お二人とも、それぞれ弱視と全盲の視覚障がい者である。

恥ずかしい話、筆者はもちろん、当館職員の大部分は面と向かって視覚に障がいがある方とやり取りした経験がなく、基本的な接し方も何も知らなかった。この時のお二人の訪問の目的は、当時読書ルームに置いていた「さわれる和船の模型」。これはそもそもこのお客様の従兄

弟にあたる方が、船好きなこの方のために制作された模型だったのだが、「自分だけでなく多くの視覚障がい者にさわってもらいたい」と、当館に寄贈くださったものだった。

今でこそハンズオン展示は珍しいものではなくなったが、ひと昔前は、博物館の展示といえば「お手をふれないでください」なモノばかり。ましてや海事系博物館において、船、それも帆船の模型といえば、細かい部品や複雑な取り回しのロープなどが付いており、最もさわってはいけない展示品の筆頭だろう。ところが、この寄贈された和船の模型5点は、元々さわるために作られた模型である。船体の基本的な構造や特徴はキープしつつ、大胆に省略して細かい部品を少なくし、破損しにくくしてある。記者の方は、この模型をさわってみたいと、わざわざ当館へお二人で足を運んでくださったのであった。

3. 「おはなし会＋さわれる船の模型体験会」

お二人と話し込んでいるうちに、読書ルームで開催している親子向けの絵本の読み聞かせイベント「海と船のおはなし会」の話になった。筆者がふと「おはなし会に、さわれる船の模型体験会を合体させたら、面白いかもしれませんね？」と口走ると「それは良い！是非ともやってほしい」ということになり、当館の事業方針としても「障がいの有る無しに関わらず、どんな方でも楽しめる事業をどんどん増やしていこう」という事になり、たちまちこの「合体版」イベントは開催決定となった。

記者の方がイベントの告知記事を新聞に掲載する手筈を整えてくださり、多くの関係者の知るところとなった様だ。当日は、わざわざこのイベントのため、大阪からお一人で参加された視覚障がい者の男性をはじめ、何人もの視覚障がい者の方々や晴眼者（目が見える人）のお客さまもたくさん参加され、大盛況となった。この視覚障がい者も新たな対象に加えた「さわれるイベント」は、船の科学館として初めての試みだったが、改めて見えない方、見えにくい方の「さわれるもの」に対する需要の高さを再認識することとなった。

ここで少々個人的な話しになるのをお許しいただきたい。この「海と船のおはなし会&さわれる船の模型体験会」を、その後何度か実施したのだが、ちょうどその頃受けた健康診断で、自分自身の眼に問題があることが発覚した。眼科で受けた精密検査で出た診察結果は「緑内障」。緑内障は、視神経が圧迫され徐々に視野が欠損していく病気で、日本における失明原因の第一位である。検査では中心右よりの視野が欠損し始めていた。

眼はとても賢い臓器で、欠損部分が小さいうちは自力で補完してしまうため、全く自覚症状はなく、まさに晴天の霹靂だった。・・・もしや近い将来、このまま症状が進めば、仕事どころか日常生活さえも、今のように送れなくなってしまうかもしれない。「視覚障がい」という言葉が、一気に自分ごとになった瞬間だった。

4. 「実物」を使う？！

さて、前述の「海と船のおはなし会&さわられる模型体験会」は、その後何回か開催し、好評を博していたのだが、事業としては一つの壁にぶつかっていた。模型を使って船の構造を説明することはできるのだが、例えば生まれつき全盲という方に「100メートルの船」と言葉で表しても、いまいち納得していただけないのである。どうしたら大きな船のスケール感を、目が不自由な方に伝えられるだろうか？

悩んでいた時、ふと3階の読書ルームから見下ろす海面に係留展示していた“宗谷”に目が止まった。そうだ！大きさを感じていただくのに、いっそのこと実物の船を使ったらどうだろう？！



「海の日」に掲げた国際信号旗の満船飾でドレスアップした、初代南極観測船“宗谷”

“宗谷”を「さわる」には、まず順路の安全確保を第一に考えなければならない。船には海難事故などが発生した時に、船内各所への浸水を防ぐためのバルクヘッド（隔壁）という扉付きの壁が随所に付いている。足元が15センチくらい甲板から立ち上がっており、まずはこれを跨いで通り抜けなければならない。一つ下の甲板は天井が低く、一番低いところは164センチしかない。さらにここから操船をするブリッジ（船橋：操船をする場所）までは階段をいくつも上る必要がある。まさにバリアフリーの真逆、「バリアフル」なのである。こんな場所で、視覚障がい者の方々に安全にガイドすることができるのだろうか？

まずは色々と視覚障がいについての本を図書館で調査し、さらに偶然新聞記事の中に見つけた、日本点字図書館が主催するガイドヘルパーの講習会も受講し、基本的な同行援護について学んだ。そしてアイマスクを付けて他の職員と一緒に船内を歩き、危険や問題がある箇所をピックアップしながら、ツアーガイドの順路を練り上げた。

順路案を考えながら、学芸部内でのディスカッションを経て出たアイデアが、船内でただ説明を聞き、さわりながら歩くだけではなく、例えば匂いを嗅いでみたらどうだろう？音は？或いはツアーの参加者御本人に声を出していただいたら？つまり視覚と味覚以外の「三感」を



「よっこらしょ」と跨ぐ必要のあるバルクヘッド（隔壁）。大きく跨いでください、と案内する。

フルに稼働させる体験ツアーにしては？ということ。

そんな発想から生まれたのが、

- ・ 南極の氷や石の実物にタッチして、触感や冷たさを体験する。
- ・ 南極の氷の中の空気（数千年前のものが閉じ込められている）がはぜる時の音を聞く。
- ・ 宗谷の模型をさわり、船の形や自分が広い船内のどこにいるのかをイメージしてもらう。
- ・ 船首のハッチの蓋を開け、中に向かって「ヤッホー！」と叫んでいただく。声の反響で、以前倉庫として使われていたハッチの中が、深くて広いのが感じられる。
- ・ 昔の医薬品がそのまま保管展示されている医務室のガラス扉を開け、中の匂いを嗅ぐ。
- ・ ブリッジ（船橋）横の張り出しに号鐘を吊下げ、船独特のスタイルで鳴らしてもらう。
- ・ ブリッジにある伝声管（各部署に命令や連絡を伝える金属の管）を使って発声。下の甲板で管の先に待機するスタッフが伝言をリピートバックし、上のブリッジでそれを聞く。



南極の氷にタッチ！冷たさや触感などの直接的な刺激で、殆どの方から笑顔が見られる。

さらにスペシャルガイドとして、元“宗谷”乗組員で、第5次・6次の南極観測航海に航空機整備員として参加されたボランティアに応援を依頼し、当時の体験談を随所でお話いただくことにした。なんとと言っても、体験した人の話が一番面白い。

5. トライアルから、いよいよ本番へ

目の見える学芸スタッフの考えだけでは机上の空論となってしまうため、当の見えない・見えにくいの方々のご意見も伺わなくてはと、前述のお客様に連絡し、その方が所属されている地域の視覚障害者団体のグループにお越しいただき、我々が考えた一通りのメニューを体験していただいた上で、アドバイスを頂戴することにした。

このトライアルは2、3回行ったと記憶しているが、最初の頃は時間配分がうまくいかず、予定の1時間半をかなりオーバーしてしまった。なにしろ古い船なので、ソ連の注文による建造開始、“ボロチャエベツ”としての進水から戦雲垂れ込める中でのキャンセル。竣工後は貨物船“地領丸”。第二次世界大戦開戦後、大日本帝国海軍の特務艦“宗谷”となり、戦後は引き揚げ船、灯台補給船を経たのち、初代南極観測船として6回の南極往復、その後海上保安庁の巡視船時代と、波乱に富んだ“宗谷”の来し方を端折って語るだけでも、15分程度はかかって

しまう。

南極観測の歴史と意義を語ることも外せない。南極観測がどうして始まったのか、何を調査観測しているのか、そしてそれにどういう意義があるのか。話を聞いていただきながら、実物の南極の水をさわり、中に閉じ込められた数千年前の空気がはぜる音を聞いていただくのも、元南極観測船ならではのイベントだ。

欲張って色々詰め込んだため、なかなか予定時間に終了できなかったが、参加者の反応は概ね「大変興味深かった」というものだった。いただいたご意見を元に検討を重ね、いよいよ一般公募開始までこぎ着けた。

6. 公募の難しさ

一般に公募するとなると、まず公式HP。それからブログ、X（旧ツイッター）、インスタなどのSNSに流すのが常套手段だろう。最近は、スマホの読み上げ機能を使われる方が多く、申し込み受付の時に情報源を伺うと、圧倒的にインターネット経由が多い。

が、しかし最初の頃はなかなか集まらず、知り合いに来てもらったり、近くの視覚障がい者団体などに電話を掛けて、ご招待のような形で参加していただいたこともあった。しかしこの方法では、なかなか広まらない。途中から手法を変え、視覚障がい者の大きな団体に広報を依頼し、さらにピンポイントで、比較的近場の団体などに2か月前までに情報を流すようにしたところ、驚くほど大きな反響があった。



実物大カラフト犬タロ・ジロにタッチ！
コーナーは、特に女性に人気のポイントだ。

因みに、上記の「2か月前以上前」という余裕については理由がある。「宗谷にタッチ！」では、船内での安全確保のため「同行援護の方と一緒に」ということを参加条件としている。同行援護者については家族でも友人でも構わないのだが、例えばプロのヘルパーさんに依頼する場合、緊急時を除いて、できるだけ一か月前までに申し込む必要がある。当該イベントは定員を上回った場合、抽選になるので、告知⇒申し込み受付⇒締切⇒抽選⇒当落を御本人へお知らせ⇒当選した参加者はヘルパーさんの手配開始、という段取りを逆算し、2か月と設定したものだ。

最近では、「宗谷にタッチ！」の公募を開始すると、毎回定員5組10名のほぼ4倍の方から申し込みが入るようになった。さらに申し込み受付時に伺っている情報源で、こちらが流していない団体名があった場合、次の募集時にその団体にも告知メールをお送りするようにしている。地味で手間のかかる手段だが、この方法が確実にエントリー数を増やしていると思われる。

7. これからの「タッチ！」

参加された皆さんと現場でお話して、「ずっとこのイベントに興味を持っていた」とか「参加した友人から、すごく楽しかったと聞いて申し込んだ」などと伺うようになり、この「宗谷にタッチ！」という当館の事業が、視覚障がい者の中で徐々に認知されつつあるのを感じるようになった。大変光栄なことだ。

昨年夏、視察に来ていただいた点字関連団体の協力で、“宗谷”解説リーフレットの墨点併記版（点字と、晴眼者が読める印刷の墨文字を併記したもの）も作成し、イベント終了後、皆さんに配布している。全ての視覚障がい者が点字を読めるわけではないが、墨文字も併記しているので、ご家族へのお土産にもなり好評だ。次は、現在1隻しかない「さわれる宗谷の模型」の3Dプリンターによる増産や、船内の平面図や側面図などが、さわって理解できるような「触図」も手掛けてみたい。

日本国内には、障害者手帳を持つ視覚障がい者は31万人。手帳を所持しないロービジョンの方を含めると164万人とも言われている。まだまだカラフト犬タロ・ジロや船舶としての“宗谷”に興味がある、見えない・見えにくい方は全国に沢山いらっしゃるだろう。視覚障がいのある方々が使える限りの感覚をフルに使って、ここまで「非日常体験」をしていただけるのは、博物館として実物の保存船舶である“宗谷”を所有する当館ならではの取り組みと言えよう。本事業においても、船内のタッチングポイントや触れる資料を充実させ、参加される皆様にもっと喜んでいただきたいと、日々考えている。また、“宗谷”自体の物理的なバリアフリー対応には限界があるが、職員を対象とした配慮の必要な方々への接し方等を学ぶ講習や手話講習が行われるなど、ソフト面でのバリアフリー対応が進んでいる。これからの博物館にとって、ダイバーシティへの取り組みが重要な課題の一つであることは自明の理であると共に、視覚障がい者に限らず、配慮の必要な人は年々増加の傾向にある。今後、各館それぞれのスタイルによるこのような取り組みが、徐々に増えていって欲しいと切に願う次第である。



イベント終了後の記念撮影。終了後はアンケートを取り、改善点や良かったことなどを次に活かしている。